



国境なき医師団報告書

2003 年 6 月

イングーシのチェチェン難民調査～帰還を迫られる難民たち～

目次

)はじめに

- A. 調査の背景：帰還を強制され様々な圧力を受けているチェチェン難民 . . . P3
- B. 調査の目的：最も援助を必要としている人々の特定 . . . P5

)調査結果

- A. 人口調査 . . . P6
- B. テントの状態 . . . P7
- C. チェチェンへの帰還について . . . P8
- D. キャンプ閉鎖とイングーシでの代替避難所 . . . P9
- E. 最も援助を必要とする家族の特定 . . . P11
- F. チェチェンへの帰還を強制されるイングーシのチェチェン難民 . . . P11
- G. 結論 . . . P13

)付属資料

- A. 調査票 . . . P15
- B. 年表 . . . P17
- C. 北コーカサスにおける MSF の活動 . . . P23

はじめに

A. 調査の背景：帰還を強制され様々な圧力を受けているチェチェン難民

2001 年以来、国際医療援助団体「国境なき医師団(MSF)」はイングーシで厳しい避難生活を続けているチェチェン難民のために避難所の設置を行なってきた。対象となったのは「無断定住地」(主に廃屋となった工場や農場)やテント・キャンプに住んでいる家族である。2001 年と 2002 年を通して MSF は廃屋となった建物を修復するほか、230 もの仮設避難所を建設した。2002 年にはさらに 200 張りのテントをアキユルト、ロゴパス、ラスピエト / MRO キャンプに住んでいる難民の家族に提供した。

しかし 2002 年 5 月、イングーシとチェチェンの連邦当局がチェチェン難民の帰還を進める「20 ポイント計画」に署名した結果、テントキャンプから難民を追い出す動きが始まった。2002 年 7 月にはチェチェン北部にあるズメナンスコエのキャンプが、そしてその半年後にはイングーシのアキユルトのキャンプがイングーシ当局によって相次いで閉鎖された。

2002 年の夏の間、イングーシのテントキャンプに暮らすチェチェン難民は、キャンプは閉鎖されチェチェンに帰されると聞かされていた。それ以外の選択肢は何も示されなかった。帰還を促す情報はチェチェン難民問題対策委員会の担当官がキャンプを訪れた際、あるいはラジオやテレビを通して、またキャンプで配付される新聞などで度々伝えられた。キャンプの閉鎖については異なる期限が発表されており、様々な噂も流れ、人々の不安はさらに煽られることとなった。人々が耳にした情報をまとめると以下ようになる。

- 「20 ポイント計画」は難民をチェチェンに帰還させるためのものである。
- キャンプは閉鎖される。
- 帰還はすでに始まっている。
- ガス、水道、電気は止められる。
- 難民はチェチェンで金銭、住宅、援助を受け取れる。
- チェチェンに早く帰った家族ほどより良い支援が受けられる。すぐに戻らなければ支援を受けることができなくなる恐れがある。
- NGO はイングーシを引き揚げるか援助を減らすことになる。

様々な圧力を受けていたこの時期、あるチェチェン難民は帰還計画に対する不安を次のように語った。「今出発した方がまだいいよ。10 月まで待ってたら彼らは力づくで我々を外に放り出すだろうから。それはいやだ。自分の意志で帰還をする方がましだ。」

平和的な手段で抗議したチェチェン難民の中にはチェチェン分離主義者に操られているとして糾弾される者もいた。

難民が自ら帰還を望んでいるとは考えられないとして国際社会や人権保護団体が抗議を強めるなか、2002 年 12 月、アキユルトのキャンプが閉鎖された。この閉鎖を受け、MSF は替わりの避難施設を提供すべく避難所設置プログラムを急いで進めていた。1 部屋からなる避難施設 180 戸分が建設され、ECHO(欧州人道援助局)やノルウェー外務省からの資金援助を得てさらに 1,200 戸以上の建設が予定されていた。イングーシ国内で避難所提供のために活動する人道援助団体すべてを合わせると、およそ 3,000 もの代替避難所が準備される予定だった。

ところが 2003 年 1 月末、イングーシにある全ての代替避難所の提供はイングーシ政府により差し止められてしまった。政府は全ての建築物は耐久建築規定に準拠しなければならないという命令を出し、そのためすでに完成していた MSF の避難所 180 戸は違法とされ取り壊しを命じられた。難民たちはそこへ入居することを許可されないまま現在も空家となっている。そして設置を予定していた 1,200 の避難所の建設も進んでいない。

ロシア当局、ジアジコフ大統領を含めたイングーシ当局、MSF、国連、ECHO、欧州委員会の各代表、数カ国の大使とで何回も討議を重ねたにもかかわらず、この問題の解決は未だについていない。

MSF が難民のために設置した 180 戸の代替避難所。当局に違法とされ現在も使われていない。



B. 調査の目的：最も援助を必要としている人々の特定

MSF による調査の目的はイングーシに避難所を必要としているテントキャンプ住まいのチェチェン難民が必要としているもの、望むことについて知ることである。そして避難所プログラムの対象となる最も弱い立場にある家族を特定することである。

調査はイングーシのテントキャンプに住む全ての難民の家族を対象に 8 カ所のテントキャンプで行なわれた。すなわち 5 カ所の“公認”キャンプ(スレプツォフスカヤのアリナ、ベラ、サトジタ、スプートニク、さらにカラブラクのバルト)と 3 カ所の“非公認”キャンプ(ナズランのロゴバス、スレプツォフスカヤのラシビエト / MRQ、ヤンダレのウチホーズ)である。

調査は 2003 年 2 月 3 日から 16 日にかけて 25 人の MSF の調査員により実施された。(その期間に不在の家族については 3 月半ばに再調査した。)家族ごとに選択式のアンケート調査を行ない、合計で 3,209 の回答を得た。再調査時にも不在だった 39 家族はこの調査に含まなかった。



イングーシに住むほとんどの難民は不安定な状態で生活しており、どの家族がより援助を必要としているかを判断することは非常に困難だった。判断するための主な条件は、**その家族がチェチェンに戻ることを望んでいないかどうか、イングーシに替わりの避難所のあてがあるかどうか**だった。無断定住地では多くの難民がテントキャンプに住む難民より悪い状態で生活してはいたが、そのとき強制帰還の主な対象にはなっていなかったため、今回の調査には含めなかった。さらに次の条件もあてはめた。**5 歳以下の子どもがいる家族、妊産婦のいる家族、高齢者(75 歳以上)のいる家族、障害者のいる家族、そして様々ではあるが特別な状況下にある家族(例えば、テントをすでになくしてすぐにでも避難所を必要としている家族)**などである。**テントの状態(雨漏り、寒さに対する防備、適切な床が張られているか)**も考慮された。

）調査結果

この調査の主な目的はテントキャンプが閉鎖されるという見通しのもとに、援助と代替避難所を最も必要としている家族を特定することにある。

MSF の調査員が 19,035 人の難民のうち実際に会って確認できたのは 16,499 人で、3,209 の家族が調査のための面接に応じた。これは 8 ヲ所のテントキャンプ(ロゴバス、ラスピエト、ウチホーズを含む)に住む難民数のほとんどに相当する。ただ 39 家族だけは再度の訪問でも会えなかった。なので面接をしなかった。

面接した家族のほとんどは貧しい状態で生活が続けている。雨漏りがし、寒さを防ぐ備えもなく、床すらないテントで暮らしている家族が 52%であった。

面接を受けた人々のうち 98%以上が近い将来のチェチェンへの帰還を望んでいない。

チェチェンでの安全が保証されないこと、それがイングーシのテントキャンプに住むチェチェン難民が帰還を拒む主たる理由である。チェチェンに帰りたくないと答えた人の 93%が家族の身の安全に不安を抱いていると答えた。

第 2 の理由はチェチェンに住むところがないということである。74%の家族がチェチェンに家がないことを帰らない理由として挙げた。

人道援助の存在は、難民がチェチェンに戻るかイングーシに留まるかの選択を左右する決定的要因にはなっていない。88%の家族がチェチェンに帰らない理由として援助のことは挙げなかった。

チェチェンに帰る予定のない 98%の家族のうち 90%はイングーシに滞在できる替わりの避難先のあてがないと答えた。3,151 世帯のうちの 2,827 世帯にあたり 14,443 人がすぐにでも避難所を必要としていることになる。

これらの事実にもかかわらず、すでに数家族はチェチェンで身を寄せる場所が見つかるかどうかの保証もないままキャンプを去っていった。そして現在もイングーシでの代替避難所の提供は差し止められたままだ。

A.人口調査

イングーシにあるチェチェン難民のために設置されたキャンプ 8 ヲ所すべてから計 3,209 家族が質問を受け、回答がデータベースにまとめられた。(これにはウチホーズ、ロゴバス、MRO/ラスピエトにある無断定住地に住む家族は含まれていない。)

これらの家族は合計 16,499 人に上った。難民からの申告数は 19,035 人だった。この数の違いは

調査員が訪問したときに不在だった家族がいるためである。これらの家族の元へは再度訪問したが、不在の場合は調査の対象としなかった。よって MSF が確認した住民の数は実際の人数よりは若干少ないことになる。

キャンプ	世帯数	調査員が数えた 人数	面接した家族の 申告による人数
バート	480	2,640	2,858
ロゴバス	47	239	265
アリナ	553	2,526	2,952
ベラ	500	2,276	2,886
ラスビエト / MRO	192	1,075	1,128
サチータ	603	3,314	3,950
スプートニク	786	4,184	4,718
ウチホーズ	48	245	278
計	3,209	16,499	19,035

年齢

住民総数の 14%(2327 人)が 5 歳以下の子どもであり 1 %(195 人)が 75 歳以上の高齢者である。

妊産婦

妊娠している女性は住民総数の 2%(292 人)である。

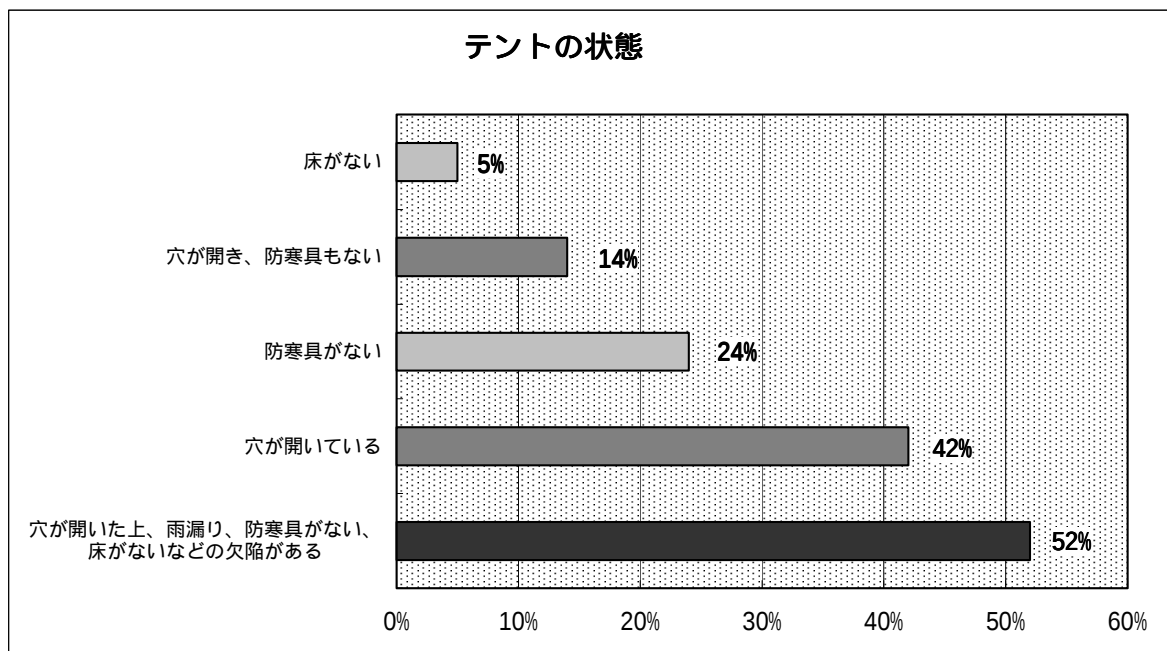
障害者

総世帯数の 5%(150 世帯)に麻痺、手足の切断、失明、精神薄弱などの障害をもった人が 1 人以上いる。

B. テントの状態

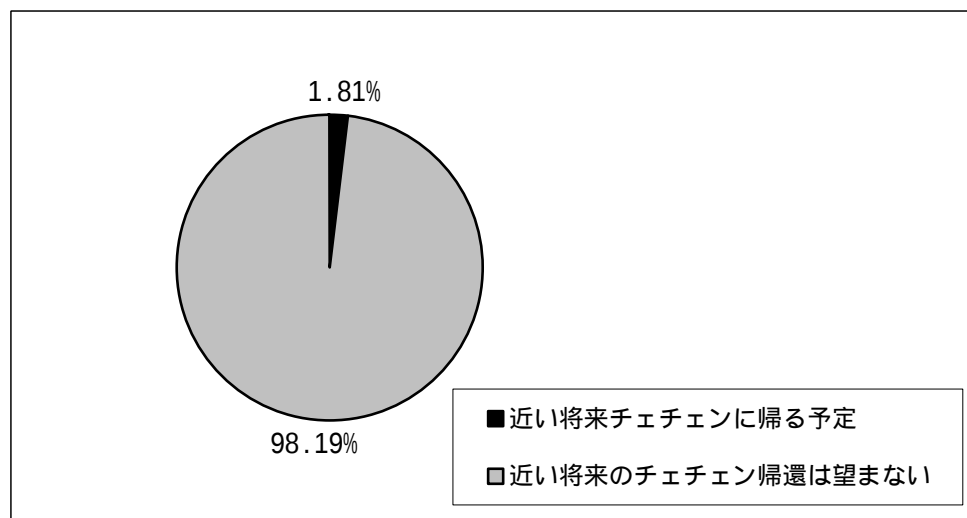
面接した家族の 98%(3,209 世帯中 3,159 世帯)がテントに住んでいる。

- ・ 52%(1,653 世帯)のテントは穴が開いている上に、雨漏り、防寒具がない、床(コンクリートまたは板張り)がないなどの欠陥が見られる。
- ・ 42%(1,317 世帯)のテントは穴が開いている。
- ・ 24%(749 世帯)のテントには防寒具がない。
- ・ 14%(437 世帯)のテントは穴が開き、防寒具もない。
- ・ 5%(145 世帯)のテントは床がない。



C. チェチェンへの帰還について

1) 98%を超える家族が近い将来のチェチェン帰還を望んでいない。



テントキャンプでの受け入れがたい生活状態にもかかわらず、面接した家族の 98%(3,209 世帯中 3,151 世帯)が近い将来のチェチェン帰還を望んでいない。

a. イングーシのキャンプに住むチェチェン難民が帰還を望まない第一の理由は安全が保証されないことである。

チェチェンに帰りたくないと答えた人の 93%(3,151 世帯中 2,921 世帯)が家族の身の安全に不安

があると述べた。

b. チェチェンに戻りたくない 2 番目の理由は住むところがないことである。答えた家族の 74%(3,151 世帯中 2,337 世帯)が帰らない理由としてチェチェンに家がないことをあげた。

c. イングーシでの援助の有無はチェチェンに進んで帰るか否かを決める決定的要因と はなっていない。

チェチェンに帰らない理由として 88%の家族(3,151 世帯中 2,777 世帯)には援助について の言及(チェチェンには援助が少ない、あるいはイングーシには援助があるなど)はなにもなかった。10%の家族(3,151 世帯中 321 世帯)のみがチェチェンでの援助不足をあげた。

2%の家族(3,151 世帯中 67 世帯)がイングーシでの援助をあげた。

この結果はイングーシで行っている非常にわずかな援助が人々を留まらせる要因にはなっていないことをはっきりと示している。このことは「イングーシでの援助が、難民にチェチェンへの帰還を思いとどまらせている主な理由である」とするチェチェン、イングーシ、ロシア各当局の主張とは矛盾する。とはいえチェチェンでの援助もまた不十分である。それはチェチェン市民を脅かす不安定な状況が人道援助団体をも脅かしていることを意味している。

2) 面接を受けた家族のうち 2%も満たない家族(1.81% : 58 世帯)のみが近い将来チェチェンに帰ることを予定している。

この 58 の家族の答えのうち共通していたのが「家に帰りたい」だった。

D. キャンプ閉鎖とイングーシでの代替避難所

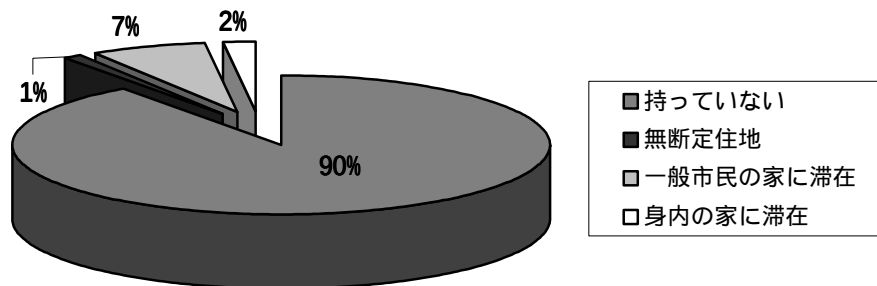
1. イングーシには替わりの場所がない

調査した全家族の 90%が、今住んでいるところ以外にイングーシに滞在できる場所がなかった。

近い将来チェチェンに戻る予定の 58 世帯のうち 51 世帯はイングーシに滞在できる代替の場所がなかった。7 世帯だけが他の滞在先(身内や友人など)があると述べた。

近い将来チェチェンに戻る予定のない家族のうち 90%はイングーシに替わりの避難先がなかった。その数は 3,151 世帯のうちの 2,827 世帯、14,443 人にのぼる。イングーシに留まることがチェチェン人家族にとっての一つの選択肢になるためには、2,827 戸以上の避難所を建てなければならないことになる。

帰還を望まない難民のイングーシにおける代替避難先



近い将来のチェチェン帰還を望んでいないが イングーシにも替わりの滞在先のない家族		
キャンプ	世帯数	人数
スプートニク	698	3,695
サチータ	526	2,838
アリナ	479	2,163
バート	434	2,376
ベラ	410	1,830
ラスビエト	185	1,047
ウチホーズ	48	245
ロゴバス	47	239
計	2,827	14,433

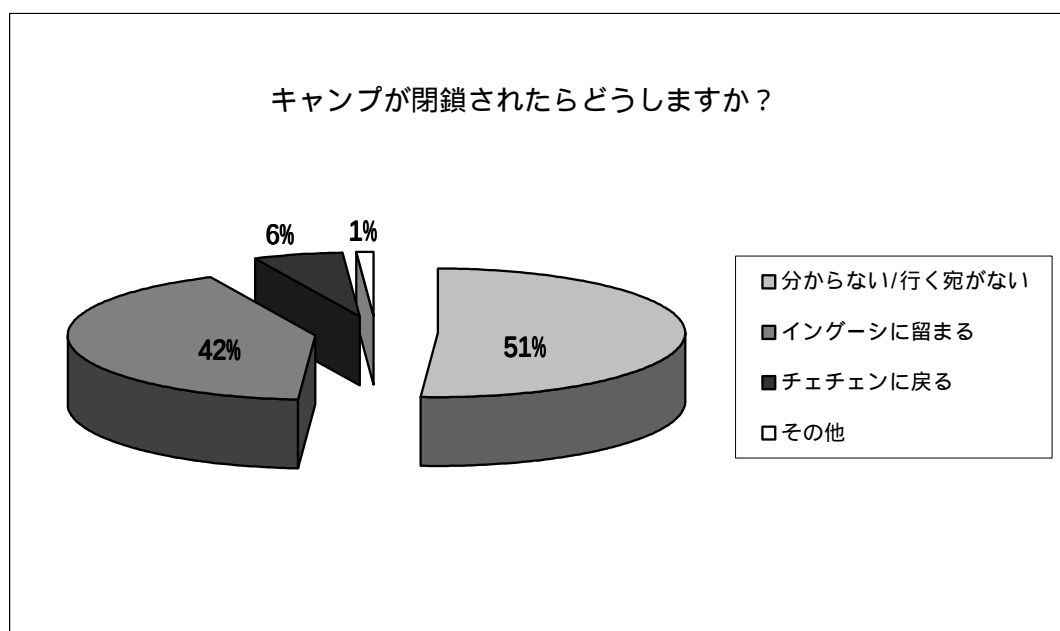
2. キャンプが閉鎖されたらどうしますか？

チェチェンに帰るつもりのない3,151世帯のうち：

-6%の家族(202世帯)はキャンプが閉鎖されたらチェチェンに戻るだろうと答えた。そのうち92%(185世帯)はイングーシに滞在できる場所はないと答えた。

-42%(1,319世帯)はキャンプが閉鎖されてもイングーシに留まると答えた。しかしそのうち81%(1,071世帯)はイングーシに滞在できる場所はないと答え、19%(248世帯)はイングーシに滞在場所があると答えた。

-51%(1,638 世帯)はキャンプが閉鎖されたらどこに行けばいいか行く当てがないと答えた。



E. 最も援助を必要とする家族の特定

近い将来のチェチェン帰還を望まない 2,827 世帯(14,443 人)のうち 2,029 世帯は、イングーシに替わりの避難先もない上にいくつかの要因が重なり厳しい状況に置かれた家族である。

厳しい状況に置かれている家族(2,827 世帯)に見られる要因：

- ・ 46% (1,285 世帯)には 0～5 歳の幼児(計 2,041 人)がいる。
- ・ 41% (1,150 世帯)には 6 人以上の家族がいる。
- ・ 9% (245 世帯)には妊産婦(計 248 人)がいる。
- ・ 5% (150 世帯)には 75 歳以上の高齢者がいる(計 163 人)。
- ・ 5%の家族(134 世帯)には重度の障害者がいる。

F. チェチェンへの帰還を強制されるイングーシのチェチェン難民

2002 年 5 月のチェチェン難民の帰還に関する 20 ポイント計画の発表と 2 カ所のキャンプの閉鎖(2002 年夏のチェチェン北部ズナメンスコエ、2002 年 12 月のイングーシ北部アキユルト)以降、難民は少しずつイングーシからチェチェンに戻っている。

UNHCR の協力団体である VESTA の記録によると、2003 年 1 月 1 日から 3 月 28 日までにイングーシ各地からチェチェンに 3,184 人(キャンプのほか一般住民の家、無断定住地に住んでいた人も

含む)が帰還した。

ベラ・キャンプ

2003年4月のチェチェン避難民問題対策委員会(難民帰還を進める役割を担うチェチェン政府の機関)の数字によるとベラ・キャンプの30ないし40世帯がチェチェンに帰ることを望んでない。しかしMSFの調査ではベラに住む(500世帯のうち)480世帯が帰還を望んでいない。そのうち453世帯は理由として安全が保証されないことをあげている。

チェチェン避難民問題対策委員会はさらにイングーシに留まりたいとした30〜40の家族には替わりの避難所を用意する計画であると述べている。しかしMSFの調査が示すように2002年2月の時点でベラ・キャンプに住む429家族はキャンプが閉鎖された場合イングーシ国内に行く当てはなかった。彼らには他に選択肢はなにもないのである。

難民をキャンプから立ち退かせるための様々な圧力

1. 難民はキャンプが閉鎖すること、その期限についても常に聞かされている(最近では2003年の春といわれていた)。難民はチェチェンのズナメンスコエ・キャンプやイングーシのアキユルト・キャンプの閉鎖を見ているので、キャンプ閉鎖が単なる口先の脅しではなく実際にそうなりうることを知っている。

2. チェチェン政府は戦争で受けた被害に対して一家族あたり2,000〜15,000 USDの補償をすることを発表した。しかしこれまで難民にはその保障はチェチェンに住んでいる人々だけに与えられるものであると知らされてきた。テントキャンプに住む難民家族の93%は不安定な状況ゆえに帰還を望んでいないのに、彼らが帰らない限りその補償を受け取る資格がないということになる。

3. 政府は難民への援助プログラムに関し人道援助団体に対しても妨害や規制を課し徹底した無支援政策を推し進めている。難民はその政策に苦しめられてきた。すでに同じ状態で4度目の冬を過ごさねばならない人々は、この受け入れがたい生活状態に疲労困憊している。

4. キャンプの閉鎖が発表されても替わりの避難所は提供されない。

チェチェン難民は帰還を望んでおらず、イングーシに留まれる別の場所も与えられていないことは、MSFの調査で疑う余地もなく明らかである。難民は自由意志によるものではなく、圧力に屈して帰還を余儀なくされている。

G. 結論

イングーシのテントに暮らすチェチェンの人々の 98%は主に身の安全を心配してチェチェンへの帰還を望んでいないということを MSF の調査は示している。

「私は肅清を恐れています。キャンプの閉鎖についても考えたくありません。人道援助団体に助けて欲しいです。」

「チェチェンでの家族が心配です。家は破壊されました。もしキャンプが閉鎖されたらどうしたらいいかわかりません。他の人達と同じようにします。キャンプの閉鎖が心配です。」

(チェチェン難民)

今日でもチェチェンの状況は一般市民にとって不安定なままである。近い将来のチェチェンへの帰還を考えていない家族の 93%はその理由として安全でないことをあげている。チェチェンでのエスカレートした暴力や治安の悪さは周知の事実であり、肅清、行方不明、殺人、拷問、爆撃など常に住民は生命を脅かされている。チェチェンの政府筋からの情報によれば 2003 年初めから 217 人が行方不明になっており、そのうち 99 人は武装した兵員輸送車すなわち連邦軍により連れ去られたという。76 人は国民投票(3 月 23 日)の翌月に誘拐され行方がわからなくなった。砲撃や爆発はチェチェンでは今も日常茶飯事である。その最大のものは 2002 年 12 月にグロズヌイでチェチェン政府の建物が爆破されたことである。それ以来紛争関連の事件は毎週のように起きている。

面接を受けた家族の半数以上は状態の悪いテント(雨漏りのする、適切な防寒具のない、床のない)で劣悪な生活環境にあっても、チェチェンへの帰還を拒んでいた。キャンプが閉鎖された場合、問題となるのは彼らにはほかにイングーシに留まれる所がないということである。

イングーシでの非常にわずかな人道援助は人々を留ませる要因にはなっていない。面接を受けた家族の 88%がチェチェンへ帰りたくない理由として援助については言及しなかった。このことはチェチェン、イングーシ、ロシア当局が発表したイングーシのチェチェン難民への支援を人々がチェチェンに戻りたがらない主たる理由のひとつであると主張する声明とは矛盾する。とはいえチェチェンでの援助もまた不十分である。それはチェチェン市民を脅かす不安定な状況が人道援助団体をも脅かしているからである。

イングーシに留まろうとする人々の選択、そして誰も強制的に帰されることはないとする公式声明にもかかわらず、人道援助団体による代替の避難所の供給は差し止められたままである。MSF の調査により援助がすぐにも必要と判断した家族でさえ代替場所がなにも提供されていない。あらゆるテントキャンプに住む少なくとも 2,827 世帯(14,443 人)のために替わりの避難所の提供が必要であり、公認キャンプにいる人々はおそらく緊急にその必要がある人々であることを調査

結果は示している。

イングーシのテントキャンプに住むチェチェン難民は、目立たないが確実な方法で強制帰還への圧力を受けている。多くの家族が帰還すればそれだけイングーシに留まると決めた家族はその流れから免れられないと感じ、さらに圧力は大きくなる。難民にはイングーシに留ることができるという選択肢が与えられていない。当局から示されたテントキャンプの最新の閉鎖日は 2003 年 5 月末である。MSF が用意した避難所は空室になっており、チェチェン難民への提供はイングーシ政府により差止められたままである。帰還という選択以外に実現可能な選択肢が提示されない限り帰還は自由意志によるものとはいえない。

その他の援助提供もわざと煩雑にされた手続きのために立ち往生している。例えば、イングーシの避難民のためトイレ一つを設置しようとする場合、MSF はイングーシの首相宛に申請書を書かなければならない。申請書は 4 月 23 日に送ったが、当局は詳細を知りたいので 5 月 5 日に出頭するようにと MSF に通知してきた。

)付属資料

A. 調査票

イングーシのテントキャンプで暮らすチェチェン難民の生活状態について

1. 年月日：2003 年 / ____ / ____
2. コード：町 ____ / キャンプ ____ / 調査票番号 ____
3. 調査員コード： ____
4. 面接を受けた人の氏名： _____

☐ 母 ☐ 父 ☐ 祖父母
5. テント：有 / 無 ☐ 援助団体により提供されたもの ☐ 借入 ☐ 購入
6. 住所：ブロック番号 ____ テント / 部屋番号 ____ 区画番号 ____

各区画/部屋	回答	調査員の所見
7. 家族数		
8. 人数		
9. 面接を受けた家族の構成数		
10. 面接を受けた家族にいる 5 歳未満の 子供の数		
11. 面接を受けた家族にいる妊産婦の数		
12. 面接を受けた家族にいる高齢者(75 歳 以上)の数		

13. この区画に住む家族の中に結核を患っている家族はいますか？ 有 / 無
人数 ____ 年齢 ____
14. 隔離を要するような精神障害を患っている人はいますか？ 有 / 無
15. 疥癬にかかっている人はいますか？ 有 / 無
16. 体に障害を持った人はいますか？ 有 / 無
17. 「有」と答えた場合、どのような障害ですか？ _____
18. 家族の中で仕事を持っている人はいますか？ 有 / 無
19. 「有」と答えた場合、どのような仕事ですか？ _____
20. 近い将来チェチェンに帰るつもりですか？ 有 / 無
21. いつ帰るつもりですか？ ☐ 2～3 カ月内 ☐ 6 カ月内 ☐ 未定
22. 近い将来チェチェンに帰って暮らす予定の場合、その理由は：

☐ 家に帰りたい ☐ チェチェンに家がある ☐ チェチェンでの援助

☐ イングーシには援助がない ☐ 帰還への圧力 ☐ その他_____

23. 近い将来チェチェンに帰って住む予定のない場合、その理由は：

☐ 帰る場所／家がない ☐ チェチェンには援助がない
☐ イングーシでの支援 ☐ 安全性 ☐ その他_____

24. キャンプが閉鎖されたらどうしますか？

☐ イングーシに留まる ☐ チェチェンに戻る ☐ 未定
☐ 行くところがない ☐ その他_____

25. キャンプが閉鎖されたらイングーシに滞在できる場所がありますか？

☐ 身内／友人の家 ☐ 無断定住地 ☐ 民営住宅など ☐ 未定
☐ その他_____

26. 部屋／テントの状態：

テントは新しいですか？ はい／いいえ
屋根に雨漏りはありますか？ 有／無
寒さへの防備はありますか？ 有／無
床はありますか？ 有／無 ☐ コンクリート ☐ 板

27. 調査員のその他の所見 有／無

(生活環境、慢性疾患、その他注目すべき点など、その家族独自の状況についての所見)

B. 年表

イングーシの状況の変化、難民をチェチェンに帰還させようとする圧力、MSF の活動

2000 年 1 月

連邦当局管理下の地域からの避難民は、元々住んでいた地域で認められていた手当てを受ける権利をはく奪されるという通達がイングーシの防衛・非常事態省より出される。(UNHCR 報告、2003 年 2 月)

2001 年 4 月

連邦内務・民族・移住政策省のイングーシの出先機関が新たに到着した避難民すべての登録を中止した。移住当局の登録なしには、避難民は政府管理のキャンプの避難施設や食糧などの政府援助を受けることができない。(UNHCR 報告、2003 年 2 月)

2001 年 12 月

イングーシのチェチェン避難民の不安定な生活状態に関する MSF の調査報告を発表。ロシアの MSF チームがイングーシのキャンプにおけるテントの悲惨な状態を非難した。

12 月 28 日アウシェフ大統領辞任。イングーシでの人道援助団体の活動状況の悪化が始まる。

2002 年 1 月

イングーシで避難民のための結核病院を開設するにあたり MSF とイングーシの保健相の間で合意がなされた。

2002 年 4 月

イングーシで大統領選挙。

2002 年 5 月

MSF がイングーシ全域で 200 のテントを取替える。

ジアジコフ大統領就任。新任の保健相は MSF との合意を保留にし、修復された病院は開院しなかった。

チェチェン政府、イングーシ政府、南ロシア連邦管区大統領全権代表カザンツェフ氏との間で署名されたチェチェン難民帰還のための 20 ポイント政策を発表。

イングーシに軍隊の駐留が増え、それにつれてイングーシのチェチェン難民がらみの事件の回数も増える。5 月末連邦軍の 1 部隊がスレプツォフスカヤ・キャンプ近くに駐留する。部隊が到着した時、兵士がキャンプ内に入り銃を空に向けて発砲し住民をおびえさせる。多くの人が逃げ出

して畑に隠れ、戻ったのは翌日になってからだった。アキユルトやそのテントキャンプの入口では検問が強化された。

2002 年 7 月

チェチェン北部のズナメンスコエ・キャンプの閉鎖。ズナメンスコエのテントキャンプにいたおよそ 5,000 人のチェチェン避難民はグロズヌイに新しく建てられたいくつかの仮設宿泊センター(TAC)に強制的に移動させられた。新しく建てられた仮設宿泊センターでの生活状態は受け入れがたいもので、ズナメンスコエのときよりも悪いものである。

2002 年 7 月 10 日ロシア連邦保安局(FSB)は国連安全調整官室(UNSEC00RD)に対して、誘拐の危険が常にあるため再調査がなされるまで外国人ボランティアが参加するチェチェンでの活動はしないようにと忠告した。

ロシアの NGO 職員ニーナ・ダビドビッチが誘拐される。これを受けチェチェンでの MSF の活動は中止された。

2002 年 8 月

インゲーシのテントキャンプでロシア連邦内務省のパンフレットを配布。パンフレットには、チェチェンへの帰還を望む者が利用できる施設についてチェチェン首相イリヤソフからの情報が記載されていた。チェチェンへの帰還を望む者には世界食糧計画(WFP)から定期的に食糧が提供され、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)が食糧以外の物資を提供して生活状態を見ながら状態が不適切な場合はテントや建築資材を提供すると、そのパンフレットには書かれていた。

2002 年 8 月 1 日移民局の担当官がアキユルト・キャンプのすべてのチェチェン難民にキャンプは解体されるので難民は全てマルゴベクの集団居住センターに移動せねばならないと通告した。あるチェチェン難民の家族は「戻りたくない、このキャンプに慣れている、もう 2 年も住んでいる」と言っていた。

2002 年 8 月 12 日、ダゲスタン共和国の首都マハチカラで MSF スイスの活動責任者アルヤン・エルケル誘拐される。

2002 年 8 月 13 日、MSF の活動中止が北コーカサス全体に拡大。

2002 年 9 月

2002 年 9 月の初めからインゲーシでの MSF の活動再開。

移住局からきた連邦の担当官がアキユルトのテントキャンプは 10 月までに閉鎖と通知。

アキユルトキャンプの居住者が嘆願書に署名。9月初旬アキユルトテントキャンプのチェチェン難民は、ヨーロッパ諸国の大使、国連、欧州安全保障機構(OSCE)、PACE、イングーシの大統領とイングーシ国民、イングーシの別のキャンプにいるチェチェン難民に宛て、キャンプから出てチェチェンにもイングーシの別の場所にも移ることを望まないとする嘆願書を出した。

嘆願運動の代表が尋問のために拘束される：移動させられないよう嘆願したチェチェン難民の代表(女性2人と男性1人)が9月19日木曜日イングーシ内務省に尋問のため連行され数時間後ようやく解放された。

移住と非常事態省の担当官が訪問して難民に圧力をかける：9月の間担当官はアキユルト・キャンプを訪問し人々に移るように説得する。強制移動はさせないがテントキャンプは今後閉鎖されるという矛盾した声明が言い渡される。あるチェチェン難民によると、移動を拒否するとイングーシ・マルゴベク移住局の局長に頭を撃つと脅されたという。

9月19日木曜日FSBとイングーシ内務省によりアキユルト・テントキャンプでのデモが阻止された。キャンプは封鎖されジャーナリストや人道援助団体の代表が中に入ることはできなかった。MSFベルギーの医療チームのバス1台と調整チームのメンバー1人がなんとかキャンプの中に入ることができた。キャンプ中での人道援助団体CAREの活動は妨害された。

チェチェン武装勢力のグループがイングーシを急襲。この事件が、テントキャンプが周辺地域の安全に脅威をもたらしているというイングーシと連邦の移住局そして軍隊の主張にいっそうはずみをつけた。またこのことがテントキャンプを閉鎖しようとする取組みをいっそう加速させ、すでに作成されていたテントキャンプのすべての出入りの選考方法が厳しく強化された。

チェチェン難民がアキユルトのテントキャンプから移動し始める。2002年9月22～23日、移住局の代表と非常事態省の代表がアキユルト村にあるテントキャンプの2つのテントを解体した。難民の話によると、解体されたテントのうちの1つに住んでいた家族は宣伝活動の甲斐あってかマルゴベクの集団居住センターへ行くことに同意した。しかしその家族が現地に到着し提供された環境が元のキャンプよりもひどいとわかったとき、移動を撤回した。マルゴベクの移住局長ハシエフ氏とイングーシ移住局の代理局長アハメド・パルシエフ氏は部下にテントを撤去し家族の持ち物はテントの建っていた場所に置いておくように命令した。外に放り出された家族はテントキャンプそばの小さな掘っ建て小屋の一部屋を借りるほかなかった。

UNHCRの避難施設の専門家はアキユルトのチェチェン難民に提供された再移住地は人が暮らすのに適切なものではないと判断した。キャンプのインフラ整備に多くの資金を出した援助側はイングーシのテントキャンプの状態は許容できるものと考えていることを指摘してイングーシに

おけるチェチェン難民のための仮設避難施設に資金を出すことを拒否した。政府にも国連やヨーロッパの援助国にも、アキユルトのチェチェン難民をイングーシでもチェチェンでも替わりの避難施設に迎え入れるために何の準備がないことが明らかになった。

2002 年 10 月

2002 年 10 月、モスクワの劇場での人質立てこもり事件で、MSF はその間必要があれば人質への援助が行えるよう劇場に詰め、解放直後には病院への医薬品の調達を組織した。事件後、イングーシのチェチェン難民への圧力は非常に強まった。キャンプの周辺に軍隊が出動することが多くなり、人道援助団体によるテントの建て替えや UNHCR のプレハブ式のテントの設置も断られた。

パートキャンプ:チェチェン政府の代表がキャンプを訪れ 11 月 15 日までに退去しグロズヌイで居住場所をもらうように人々に通知した。帰還しない者もいずれにせよイングーシから追い出されることになるのである。

MSF か ICRC の援助職員が 11 月 12 日以降誘拐される恐れがあると MSF に警告があった。

2002 年 11 月

連邦移住局の局長がモスクワの UNHCR に対し 12 月 20 日までにイングーシの全てのテントキャンプを閉鎖すると通知する。

マルゴベク地区の治安の悪化 マルゴベク地区は 11 月 15 日から 10 日間国連安全調整官室により人道援助関係者の立ち入り禁止地区になると通告された。警察によるとガラシキ (Galashki) の戦闘に関与した武装グループの残党がマルゴベク地区に逃げ込んだので特別作戦を展開するという。同時期にマルゴベク地区も含むイングーシ共和国全土でチェチェン難民の拉致や行方不明に関するいくつかの報告、マルゴベク地区に親ロシア政権の軍関係者が姿を見せたという報告もされている。4 人の死者と 9 人の負傷者を出したマルゴベクでのバス爆破事件も、チェチェンの保安担当官が 2 人の乗客の誘拐を企てたことで引き起こされた。

11 月 13 日、ICRC の運転手 2 人の拉致事件はグロズヌイとマルゴベクを結ぶ道路、チェチェンのポベディンスコエとゴラゴルスクの間で起き、2 人は 11 月 17 日の夕方に解放された。

パート・キャンプ: 気温がマイナス 20 度に下がったとき、キャンプはすでに 3 週間もガスも水もない状態だった。

2002 年 12 月

UNHCR は連邦及びイングーシの移住局より当局が選んだ再移住地に新しくプレハブ式テントを

前もって設置することを認められた。(UNHCR 報告 2003 年 2 月)

当局はアキユルトのイマン・キャンプを閉鎖した。そこではデンマーク難民評議会のデータベースによると 1,700 人の、移住局のデータベースによると約 700 人のチェチェン難民が暮らしていた。チェチェン難民は数ヶ月にわたって脅迫、法的・心理的なプレッシャーにさらされてきた。人々は 2002 年 11 月下旬に非常事態省と移住局の提供したトラックやバスでチェチェンの荒涼とした場所に運ばれた。閉鎖は 12 月 1 日にピークに達する。NGO の運営する学校を占拠していた OMON の分遣隊とイングーシ警察が退去を拒否していた家族のテントを解体し始めた。グロズヌイの仮設避難センターはどれもすでに一杯だったので連邦移住局に登録されていたチェチェン難民 700 人のみがチェチェンの民営住宅などに再定住するための財政的奨励措置を受けた。

2002 年 12 月 2 日にアキユルト・キャンプは閉鎖された。非公式の外交文書はこのことを戦争で荒廃したチェチェンの中にチェチェン難民を押し込めるスターリン主義の伝統にのっとった強制移住であると述べた。国連の当初の数字によるとアキユルトに居住していた難民のうちおよそ 40%がイングーシの無断定住地などに避難先を見つけた。

12 月 3 日、移住局の連邦代表ロストフツェフが現地の MSF チームに医療施設を解体するよう強く促した。

ロシア大統領の協力者ヤストラゼムスキー氏は 2002 年 12 月 4 日テントキャンプの廃止に対して、イングーシからのチェチェン難民の帰還に関し「問題を政治化し、非人道的な方法で解決されているように思わせる企み」があるとする見解を表明した。連邦移住局の代理局長イゴール・ユナシはマスハドフ政権の議員がテントキャンプで宣伝戦を行なっていると述べた。彼らは金を払い、テントキャンプを閉鎖させないようにする人々を納得させるだけでなく脅迫さえしようとしている。

12 月 11 日、ロシア大統領ウラジミール・プーチンはイングーシのテントキャンプからチェチェン難民をチェチェンに帰還させる再移住は延期することを約束した。プーチンはクレムリンでの大統領人権委員会の委員との会合で発言した。大統領は、特別に編成したグループが問題を調査し難民の権利を保証できる問題解決方法を考えるまで再移住は中止すべきであると述べた。この声明が出てから、イングーシの大規模なテントキャンプに対する圧力は弱まった。

2003 年 1 月

2002 年 7 月以来誘拐されていたロシアの NGO 職員ニーナ・ダビトビッチが解放される。

MSF はジアジコフ大統領と会見。その席で大統領は MSF による替わりの避難所の提供を口頭で承認した。

MSF によりチェチェンへの帰還を望まない難民のための避難所 180 戸が完成。活動は主に移住局と地方当局の調整により進められた。1 月 27 日、全ての建築物は同じ法律に準拠すべきとする新法に従って、イングーシ政府は避難所が違法であると通告した。しかし避難所の設置は新法以前に完了していたのである。今日まで避難所に移動できた家族はいない。MSF は残りの 1,020 戸の設置を続けることができないでいる。イングーシのチェチェン難民に替わりの避難所を提供することはすべて止められている。

ベラ、スプートニク、アリナの各キャンプのキャンプ管理当局は難民はすべてグロズヌイに帰らなければならないと発表する。

2003 年 2 月

ジアジコフ大統領は MSF との会合で、イングーシにおける避難所の設置の許可を与える。

一方、イングーシ政府は、建築法の技術的条件に適合しない限り、援助機関による仮設あるいは移動式（UNHCR のプレハブ式テントも含む）の設置を中止する命令を出す。（UNHCR 報告、2003 年 2 月）

2003 年 3 月

3 月 23 日、チェチェン共和国新憲法採択のための住民投票がチェチェンとチェチェン難民のいるイングーシで行なわれた。

MSF は 3 月 26 日までに避難所の取り壊しを命ずる書簡を受け取る。

2003 年 4 月

ジアジコフ大統領と MSF は再度会見し避難所について話し合う。大統領は難民用の代替避難所の問題を解決するために委員会を発足させると発表する。

人権運動団体「ピープル・イン・ニード」(PINF)メンバーの誘拐。

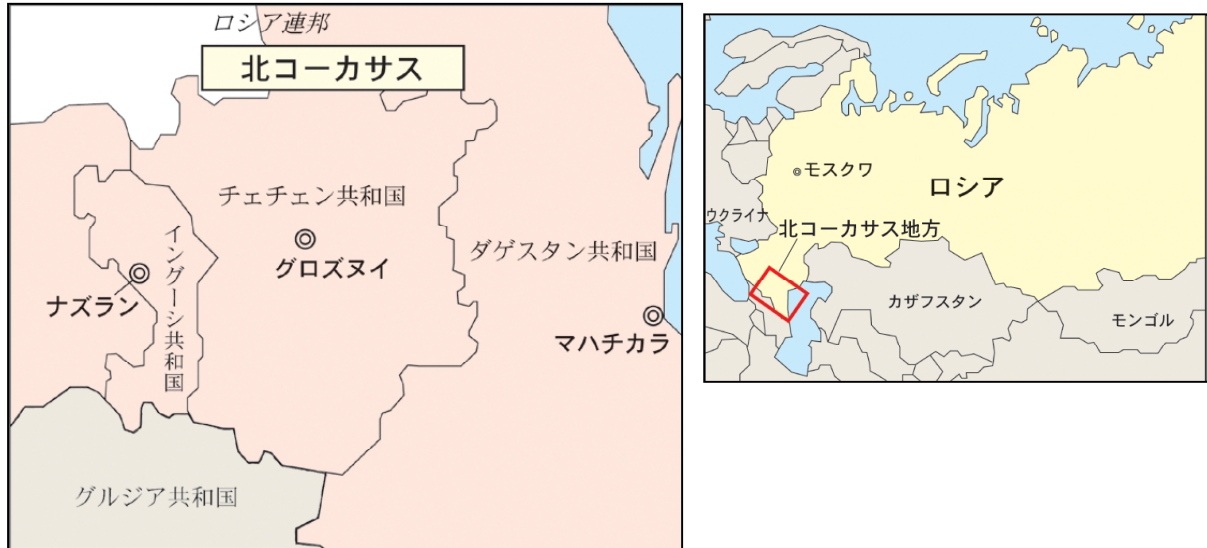
ロシア・チェチェン友好協会メンバーの誘拐。

2003 年 5 月

大統領が創設した委員会に何の進展もなし。

アウシェフ大統領は一貫してロシア政府のチェチェン進攻政策を批判し、チェチェン独立派との和平交渉を要求してきた。

C. 北コーカサスにおける MSF の活動



MSF は 1992 年にオセチア・イングーシ紛争を逃れた避難民への援助を行うため北コーカサスで活動を開始した。その後チェチェンで紛争が始まったことにもない、イングーシ共和国、チェチェン共和国、後にダゲスタン共和国で紛争の犠牲者への援助にあたっている。

イングーシ

MSF はナズラン、カラブラク、スレブツォフスカヤ、マルゴベクで産婦人科診療所、小児科診療所、一般診療所を運営している。公立の保健施設には医療器具や医療設備、医薬品を提供している。また結核患者を治療するための診療所を修復したが、プログラム自体はイングーシ保健省による許可が下りなかったため患者の治療は行なわれていない。

またイングーシで避難生活を送るチェチェン難民に対し、避難所の提供・改修のほか、ストーブ、薪、毛布、マットレス、その他食糧以外の物資配給を行っている。同様に給水所、簡易トイレ、共同シャワー、洗濯所を設けるなど水・衛生プログラムも進めている。

チェチェン

MSF はチェチェンにある 30 カ所の医療施設に医薬品や医療器具を提供するほか、保健施設の補修工事も行った。2002 年春、紛争で傷ついた人々のために心理社会プログラムを開始したが、同年 8 月にダゲスタンで北コーカサスの活動責任者アルヤン・エルケルが誘拐されて以来、ダゲスタンではすべての活動の中断し、チェチェンでの活動も緊急時の物資提供のみに限られている。